

2017年3月12日 川越教会

柔 和 な 王

加藤 享

[聖書]マタイによる福音書21章1～11節

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほだいて、わたしのところに引いて来なさい。もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、／柔和な方で、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、またほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。

[序] エルサレム行きの際の到来

主イエスは弟子たちが「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白出来るようになると、ご自分が必ずエルサレムに行き、長老・祭司長・律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっていると、弟子たちに、繰り返し打ち明け始めました。そして「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と言うペトロを「サタンよ、引き下がれ」と厳しく叱っておられます。

主イエスは、ご自分が30才まで村大工をして働いて来たナザレを含むユダヤの北部、ガリラヤ湖周辺の地域で主に宣教活動をされました。主の先づれ役を果たした洗礼者(バプテスマ)のヨハネは、ヘロデ王の罪を厳しく咎めたために牢屋に入れられていましたが、主イエスの働きが、自分の期待といささか異なるので、弟子を派遣して質問しています。「来るべき方はあなたでしょうか?」。主はお答えになりました。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」(マタイ11:5～6)

ガリラヤの人々は、主の数々の奇蹟を目の当たりして、偉大な預言者として、主を歓

迎えるようになりました。殊に大勢の人々を、僅かなパンで満腹させる奇跡を体験して、自分たちの王にしようとする動きすら出始めました。その時、主はさっと山に一人で退かれています(ヨハネ6:15)。ですから主はエルサレムの都に行くことを、努めて避けておられました(ヨハネ7:3~4)。しかし、いよいよキリストとして、エルサレムに上る時が来たのです。

[1] 大きな馬・小さなロバ

過越しの祭りに当たり、主はガリラヤからエルサレムに上っていかれました。主の数々の奇跡の御業を見聞きしたガリラヤの人々は、「このお方がいよいよ都に上って救い主なる王となって下さる」との期待をこめて、主イエスの後に群れをなして従いました。しかし主イエスは、エルサレムに近づくと、弟子に命じて、ロバを借りてこさせ、小さなロバに乗って都に入られたのです。

戦車や大砲がなかった時代には、軍馬が一番強力な国家の武力でした。イスラエルの歴史で一番栄華を誇ってソロモン王は馬に引かせた車、即ち戦車を1400台、騎兵を12000も保有していたと、聖書は記しています(列王記上10:26)。ですから国王が都に入城するときには、立派な軍馬にまたがるか、6頭曳きの馬車を仕立て、大勢の家来を引き連れた行列で、民衆の歓呼に迎えられるのが常でした。ところが主イエスは、都のエルサレムにわざわざロバに乗って入城されたのです。どうしてでしょうか。

馬は大人の背を越す大きな体をしています。脚力が強く、簡単に人間の思う通りには動きません。矢張り戦場を駆け回って敵を蹴散らかしていく役目が一番でしょう。私は小学1年生頃の夏休みに、北海道旭川の北で農業を営んでいる父の実家に遊びに行きました。農作業や馬車引き用に馬を何頭も飼っていました。馬の背にまたがって歩いてみたくなり、叔父に頼んで私より二倍以上も背の高い馬の背に乗せてもらいました。手綱をとって合図すると、歩き始めました。ただ歩くだけではつまらなくなったので、手綱をゆすり、ドウ・ドウと声をかけ首を叩くと、いきなり走り出しました。鞍をつけない裸馬です。両足で馬の胴体を挟みつけてふんばろうとしたのですが、大きな背の上で体がバウンドして、たちどころにずり落ちそうになりました。私は青くなって首にしがみつき、悲鳴をあげました。叔父が飛んできて馬を止めてくれたので、落馬寸前に助かりました。あの恐怖を今も忘れません。

馬は大きくて、人間の力では押しとめることが出来ない力を持っています。暴れ馬は、幾人もの人間を蹴散らかしてしまいます。ところがロバは人の背よりも低く柔和ですから、気安く荷物や人を運んで庶民の日常生活の助けに働いてくれます。主イエスはご

自分を、威風堂々と軍馬にまたがる王ではなく、庶民と共に生き、庶民の生活を助ける救い主としてのご自分を、ロバに乗ることで表わそうとされたのでしょうか。

「見よ、お前の王がお前のところにお出でになる。柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ロバに乗って」とのゼカリヤの預言の成就ですね。群衆は自分の服を道に敷いて、主イエスを歓迎しました。

[2] 子ロバの初仕事

さてここで、はてなと戸惑う表現に出会います。マタイ福音書は、主イエスが「子ロバがそばにいるロバを連れて来なさい」と命じておられます。では母ロバと子ロバのどちらにお乗りになったのでしょうか。引用されたゼカリヤの預言「荷を負うろばの子、子ロバに乗って」からしますと、子ロバだと思いますが、7節の言葉「ロバと子ロバを引いて来て、その上に服をかけると、お乗りになった」のその上が複数形なのです。弟子たちは母と子のどちらにお乗りになっても良いように、両方の背に座布団代わりに、自分たちの服をかけたのでしょうか。でも主がどちらに乗られたのかははっきりしません。

ちいろば牧師で有名な榎本保郎師は、主を乗せた母ロバの後ろからついていく子ロバの絵を見て、「それが自然だと思った」と書いています。「母ロバは召し出された時に、我が子のことが心配だったと思う。でも子ロバは母の後に従っていった。これなら一安心。私たちもいろいろな問題を携えてイエスに従って行く。しかし時にはこの子ロバを捨てて、イエスの後に従っていかねばならない時がくるかも知れない。でも主のみ旨に従って生きていくなれば、主は我が子をも導いて主の道を歩ませて下さるのだ」

ところが、一番古いマルコ福音書では、「まだだれも乗ったことのない子ロバのつないであるのがみつかると、それをほどいて連れて来なさい」と主は命じておられます。ルカ福音書もそれに従っています(マルコ11:2、ルカ19:30)。ここで強調されているのは、まだだれも乗ったことのない子ロバです。子ロバとはいっても、もう家の戸口につながれているのですから、母のそばに居る幼い子ロバではありません。もう一人前に成長し、いよいよこれから働き始めるロバですね。としますとこの子ロバは、生涯の初仕事として、主イエスのエルサレム入城に用いられるという光榮に浴したのです。何という嬉しい恵みでしょうか。こう考えると、若い者に記念すべき生涯の第一歩をお与えになって祝福された主イエスの優しさに、私は深い感動を覚えました。

私は、陸軍幼年学校、士官学校に進み、軍人となって、天皇に一身を捧げようと思っていましたが、幼年学校受験の手前で敗戦になりました。次に野球に明け暮れして、プロの選手になろうとしましたが、肺結核を悪化させて大咯血をし、その道も挫折。療

養生活の中で信仰が養われ、**牧師になる道**を示されて、病気回復とともに神学校に進み、牧師にならせていただきました。

30才で神学校を卒業して母教会目白ヶ丘の副牧師として第一歩を歩み始めた私は、まさに**ロバ**として働き始めた**この子ロバ**と同じでした。以来主の御用に採用された**光栄と喜び**を54年持ち続けて、今日に至りました。心から感謝せずにはおれません。

[3] 柔和な救い主

最後に、軍馬ではなく**子ロバ**を選ばれた主イエスの**意図**、**柔和な救い主**としてのエルサレム入城について、よくよく考えてみたいと思います。この**柔和さ**については、去る1月15日の説教で説明しましたが、大事なことなのでもう一度繰り返して、説明させていただきます。

「**柔和な人々は幸いである。**」と主が言われる**柔和さ**とは、**踏みつけられても反撃して**相手を打ちのめそうとせず、**じっと我慢している優しさ**を表します。そこで塚本訳聖書では「ああ幸いだ、踏みつけられてもじっと我慢している人たち、約束の地なる御国を相続するのは、その人たちだから」と記しています。

ではどうして主イエスは、エルサレムに入城されるに当たって、**このような柔和さ**を強調されたのでしょうか。それは、今日の説教の冒頭で申し上げたように、弟子たちが「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白するようになると、「ご自分が必ず**エルサレム**に行って、長老・祭司長・律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」という**ご自分の死、受難**の予告を繰り返し、弟子たちに教え始められたことと結びついています。

群衆は、主イエスの前を行く者も、後に従う者も叫びました。「**ダビデの子に ホサナ**。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」**ホサナ**とは「**いつまでも栄がありますように**」という叫びで、日本人にとっては「**万歳、万歳!**」と叫び続けることでしょう。待望の王、メシアが来て下さり、いよいよエルサレムに入城して王位についてくださるという期待。「どうか主よ、私たちに救いを。どうか主よ、私たちに栄えを。」との**ゼカリヤの預言**の成就を目の前に期待して、道に自分の服まで敷いて、主イエスのエルサレム入城を喜んだのでした。

しかしゼカリヤの9章9節の預言、「**高ぶることなく、ロバに乗って来る王**」とは、続く10節で「**エフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を断つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ**」と

言われる王なのです(9:10)。そのような平和を、ロバに乗って来る王が、どのようにして実現して行くのでしょうか。エルサレムで主を待ちうけているのは、十字架の死なのでから。

しかし主イエスは、ご自分の十字架の死、即ち受難によってこそ、ゼカリアの預言が成就されることをはっきりと自覚して、弟子たちの信仰を育てつつ、この時を迎えられたのでした。エルサレムに入られると、たちまちイエスを危険人物視するファリサイ派、律法学者、祭司たちユダヤ教の指導者達との対立が、明らかになりました。そして、彼らから憎悪のこもった迫害を受け、その強い要請に基づいて、一週間もたたないうちに、ローマ総督によって、十字架にはりつけにされてしまったのでした。

しかし主イエスは、そのひどい仕打ちをわが身に引き受け、彼らへの赦しを祈りつつ死んでいかれました。まさに踏みつけられても反撃して相手を打ちのめそうとせず、じっと我慢している柔和さそのもののお姿でした。

この受難の苦しみの恐ろしさは、ペトロはじめ弟子たち皆が身をかくしてしまう程のものでした。しかし神は、三日目に主を墓から復活させることによって、弟子たちの信仰を取り戻させ、聖霊をお降しになることによって、弟子たちにこの十字架の福音を全世界に宣教する者として、再起させられたのでした。

[結] 私たちの責任

「エフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を断つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」。このゼカリアの預言は、今日、ペトロたちから私たちに引き継がれた任務です。

わざわざロバの子を選んでそれに乗り、エルサレムに入城して行かれた柔和な救い主。ユダヤ教の指導者たちから多くの苦しみを受け、群衆の嘲笑を浴びせられながら十字架にはりつけられても、苦しみをじっと耐え忍び、彼らの罪の赦しを願いつつ、その罪の裁きをわが身に引き受けて、死んでいかれた柔和な救い主イエス・キリストこそ、全世界に平和をもたらす救い主です。この柔和な王を救い主と信じて宣べ伝え、平和な世界の到来に私たちの生涯を献げて参りましょう。

祈ります:主なる神さま、今日もロバの子に乗って、十字架の待ち受けているエルサレムに入城して行かれた、柔和な救い主のお姿を心に刻みつける機会をお与え下さって、感謝します。救い主イエスさま、あなたの柔和さを、どうかこの私にもお与えください。誇ることなく、へりくだって、友の足を洗う者にしてください。我が身を捧げる者にし

てください。主よ、全ての者から銃を取り上げてください。平和をもたらしてください。救
い主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン